

第5章 東南アジアで見た中国の影

初の特派員、東南アジアへ

少しばかり話は飛ぶが、ここで私が初めて長期滞在の特派員生活を体験したときのことをしたためておきたい。

一九六八年十月、当時の渡辺敏・外報部長から「バンコク支局に続いて、ジャカルタ支局も一時閉鎖する。君はシンガポールに支局を新設し、東南アジア各地を飛び回れ」と言い渡された。

まず、インドネシアへ

いまとは違って、まだ海外支局の少ないころだった。東南アジアには、戦火のベトナムを報道するサイゴン支局、それに西アジアのインドにニューデリー支局があるだけであった。ありがたい“お達し”だったが、この重責を果たすことができるかどうか、正直のところ、一抹の不安も感じていた。しかし、「人生、到る所青山あり」と言い聞かせつつ、まずインドネシアの首都、ジャカルタへ飛んだ。

何しろ、インドネシアは、日本の人口を上回る東南アジア最大の国。ジャカルタ支局の閉鎖にあたっては、是が非でもインドネシアの対外関係を司るアダム・マリク外相（故人）と会い、今後の取材協力を十分にお願ひしておく必要があった。

しかし、会見を申し込んで五日たっても、何の返事もなし。やむを得ず、当時のインドネシア駐在の八木大使に応援を頼んだが、大使自身が二週間前に申し込んだ会見要請も、なしのつぶてだという。

思い切って、マリク外相との会見をアレンジする外務省の情報総局長を訪ねた。彼は会見申請の書類がうずたかく積まれた机上を指さし、どんなに順調に運んでも最小限、十日はかかると言った。途方にくれたが、ねばり強く折衝を続けていると、総局長は、改めて私の名刺を見つめながら「ミスター・ヨシダ。あなたは、かの有名な吉田茂首相と関係があるのか」と聞いてきた。私は思わず、

「オー、イエス、ヒイ、イズ、マイ、グランド、ファーザー」と答えていた。彼は、本当かと聞き直し、私の顔を直視した。視線をそらさずに「オフコース」と言い放った。もちろん「血縁」はない。しかし、高知県という点では「地縁」はあった。

「しばらく待ってくれ」。総局長はこう言って席を外した。十分ほどして戻った彼は、にこやかに「明日の午前十時に、ここにいらっしゃい」と言ってくれた。

以来、ジャカルタに行くと、マリク外相は大事なときに、よく私との会見に応じ、重要な情報やヒントを示し、いろいろと取材に協力してくれた。

シンガポールに拠点

ジャカルタを離れ、シンガポールへ移った私は、ホテルに仮住まいしつつ、今後の取材基地となる、支局の開設に奔走した。当時、シンガポールには共同通信社と時事通信社があるだけで、日本の新聞社の拠点は一つもなかった。東南アジア各地のニュースをいちはやくキャッチし、かつ東京本社との連絡に便利な場所を探すことが何より重要な課題だった。

私は直ちに、朝日新聞社とも関係の深い、ロイター通信社の東南アジア総局を訪ねた。当時の総局長はジミー・ハンという韓国系の人で、いかにも精悍そうな、だが、気配りのゆき届いた人だった。交渉の結果、彼は快く総局の一室を提供してくれることになった。ここには、総局長以下、デスク、取材記者、キーパンチャーなどを含め、総勢五十人を超える人々がいた。

ベトナム情勢を含め、ここにいると、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、ラオス、カンボジア、オーストラリア、さらにはインド、パキスタンなど広範なアジア各地のニュースを直ちにつかむことができた。東京との取材連絡も、ロイター通信との「特別契約」でスムーズにとることができた。

次の仕事は、東南アジアの守備範囲で大事件が発生した場合に、いつでも飛び出せるような態勢を整えることだった。当時は、外国へ出るたびに必ず、シンガポールへ戻るための「リエントリー・ビザ」の手続きが必要だった。このために、まる一日はかかるので、何度でも自由に往復できるビザを発行してもらうことが肝要だった。管理の厳しいシンガポールでの手続きは大変だったが、幸い新聞局の配慮で一ヵ月以内に実現できた。

華僑と華人の違い

私にとって、シンガポールにはもう一つありがたいことがあった。この国は中国系、マレー系、インド系の「複合民族国家」だったが、七五パーセント近くが中国系の人々で、中国語（華語）がよく通じたことだった。ここには、福建省、広東省などからやってきた「華僑」（海外に仮住まいする中国人）が多かった。

ただ、私は当初、彼らが自分たちを中国人とと思っているに違いない、と信じ込んでいた。ところが、彼らは異口同音に「シンガポールの華人」（新加坡的華人）と言った。これはマレーシア、タイ、インドネシアなど他の東南アジア諸国でも共通した言い方だった。彼らの心理を素直に受け入れるのには時間がかかったが、第二次大戦後の中国本土や東南アジアで起こった大きな歴史の変遷や相互のあつれきを見直すことによって、それがよく理解できるようになった。この点については、またの機会に触れることにしよう。ここでは、「華僑」と区別して使う「華人」とは、中国の大地を離れて「外国に定住し、その国籍を取得した中国人」のことを言う、という点だけを述べておきたい。

いきなりパキスタンへ

さて、支局を開設、住居も定まり、仕事も軌道に乗り出した六九年三月下旬。日本から家族もやってきた。ところが、三ヵ月半ぶりの再会でにぎわっていたこの日の夕刻、東京本社から電報が届いた。

「パキスタンでクーデターが起こりそうな雲ゆきだ。すぐカラチへ飛べ」

ニューデリー特派員は、アフガニスタンに出張中とのこと。一大事だ。到着したばかりの妻と義父に後を頼み、パキスタン問題の資料ファイルを手にも、同夜の飛行便に乗り込んだ。

翌朝、カラチの宿泊先を本社に打電、情報収集のため日本の領事館と有力な商社を訪ねた。国内の混乱收拾をめぐるアユブ・カーン大統領とブット元外相の間の政争の熾烈さは理解できたが、クーデターといった緊急事態を予測する向きはなかった。その旨を東京に連絡しようとホテルに戻ると、もう指令の電報が来ていた。

「情勢緊迫。速やかにブット氏と会見せよ」一有無を言わせぬ要請だ。東京と現地での感觸の違いに戸惑ったが、直ちにブット邸に車を飛ばした。

ブットさんは大柄で、色の黒い偉丈夫だった。来意を告げると、気さくに応接間へ通された。彼が政敵、アユブ・カーン大統領の批判を始めたとき、長男がラジオを抱えて部屋に入ってきた。ベンガル語のニュースに聞き入っていたブット氏が突然、「クーデターだ。軍部が政権を握った。いや、アユブ・カーンは私を嫌って、軍部に政権を委譲したのだ。私はもう何も言えなくなった。会見はなかったことにしてほしい」

と言った。あつけにとられたが、一言、

「あなたの口から軍政委譲の発生を知らされた、ということだけは書かせてほしい」と言って飛び出した。

さらにシドニーへ直行

クーデターの第一報を、ローマ字の日本語でたたき、電報局に持ち込んだところ、早くも手厳しい検閲が始まっていた。「さっぱり意味が分からん」と言った係官は、英語に直すよう指示した。まったくの二度手間、一時間はロスした。次には、電話で東京を呼び出したが、ややこしい箇所を日本語で話したところ、盗聴された電話の奥でチェックする声が聞こえ、やっとながった回線をプツンと切られてしまった。

これはまずい、と次に使った手段が、有力な総合商社の専用テレックスだった。幸いなことに、ここは穴場でノーマーク。おかげで第三報目からは順調に、しかも日本語で送稿でき、大助かりだった。しかも、たまたま、朝日だけクーデター前日に現地に飛び込んでいたため、事件発生後に押し寄せた同業他社を、大きくリードすることができた。

当時、パキстанは東西に分かれていた。西パキстанのカラチ、イスラマバードから東パキстан（現在のバングラデシュ）のダッカに飛んで取材を続けた私は、新大統領に就任したヤヒア・カーン将軍の軍政下で、パキстан情勢は小康状態を迎えると判断。締めくくりの原稿を送り、取材基地・シンガポールへ戻る準備を始めていた。

そこへ、また東京から電報がきた。

「ご苦労さま。取材は上々」一だが、こんな文句が続いていた。

「明後日からオーストラリアのシドニーでアジア開発銀行の総会が開かれる。日本からは福田赳夫蔵相も出席するが、東京からは随行記者は出さない。シドニーへ直行し、総会を取材せよ。閉会後は福田蔵相の帰国便に同乗し、機内で会見せよ」

東南アジアへ派遣された新米特派員の生活は、こんなふうに始まっていった。

“人種騒動”の衝撃と教訓

東南アジア移動特派員として、シンガポールに取材基地を新設して以来、最初にぶつかった衝撃的な事件は、総選挙に端を発したマレーシアの“人種騒動”だった。

マレーシア総選挙が発端

複合民族国家マレーシアで、二大種族を構成するマレー系（四三パーセント）と、中国系（華人、三三パーセント）の悲劇的な対立は、五百人にのぼる死傷者を出す「流血の惨事」を引き起こした。この事件は、内部に華僑・華人社会を抱える、他の東南アジア諸国にも深刻なショックを与えた。中国問題と同時に広範囲なアジア問題を担当することになった私自身にとっても、極めて教訓に富む事件であった。

一九六九年五月十日、マレーシア全土（西マレーシア、サバ、サラワク）で行われた、十二年ぶりの総選挙では、「建国の父」と言われたラーマン首相の率いる与党・連盟党が、一応の勝利を収めた。この連盟党とは、マレー人による統一マラヤ国民組織（UMNO）を始め、マラヤ中国人協会（MCA）、マラヤ・インド人会議（MIC）で構成される政党だ。

だが、新たな矛盾を生む要因となったのは、中国系市民（華人）を主体とする野党の民主行動党（DAP）、マレーシア人民運動党（MPM）などが、大量に議席を伸ばしたことだ。彼らの掲げた最大のスローガンは「各人種の絶対的な平等性」だった。そして、与党・連盟党が、「複合民族国家の統一と繁栄」をうたいながらも、現実にはさまざまな分野で「マレー人優先政策」をとってきたことに反発していた。DAPが一議席から一挙に十三議席に躍進し、MPMが初の選挙で八議席を獲得した裏には、華人たちの積年の欲求不満が表現されていた。

しかも、この結果は、与党・連盟党の一翼を担う MCA の大きな敗北に連動していた。

MCA 会長で蔵相を兼ねるタン・シュウシン氏は当選したものの、三十三人の候補者のうち二十人が敗退し、閣僚だった四人のうち、二人が落選するという手痛い打撃を受けた。

氣勢上げる華人系野党

華人社会は二つに大別されていた。与党内の MCA は「政治より財布」を選び、野党の DAP や MPM は「各民族の機会均等」を求めた。そして、総選挙では、中国系市民の三分の二以上が、後者を選んだのだった。

この選挙結果は、DAP や MPM の支持者たちの意気を大いに上げることになった。彼らは続々と西部海岸の主要都市に集まり、十三日にはクアラルンプールで“祝賀デモ”を行う、という噂が流れた。こうした動きに、MCA のタン会長は、「選挙での敗北は、中国系市民の大半が、中国系代表を政府に送ることを拒否している表れだ」と述べ、今後 MCA のメンバーを閣僚および中央、地方政府の要職に就けないという劇的な宣言を出した。

これは、マレー人側に大きな波紋を投げかけた。ラザク副首相（後の首相）はタン氏の声明を支持するとともに、「この事態を生んだのは野党へ走った華人側にある」と言った。この発言が、マレー系市民の感情に油を注ぐ形となり、特に UMNO のタカ派、さらには回教国家の建設、マレー人の優位性を目指す宗教的色彩の濃い全マラヤ回教徒党 (PMIP) を強く刺激した。彼らも総選挙後、続々と首都クアラルンプールに集まり、「マレー人の権利」を強く主張する動きを示し出した。

総選挙後、若干の分析を含めた記事を東京に送った。だが、「東南アジアの優等生」と言われていたマレーシアで、この対立が、まさか悲劇的な「人種衝突」に発展するとは、不覚ながら予測できなかった。

五月十三日夜、その認識の甘さを、いやというほど知らされる流血の惨事は起こった。

翌日、「非常事態宣言」の出されたクアラルンプールに飛んだ。だが、交通機関は完全にストップ状態。首都空港から二十三キロの市街地へ行くのに、四時間半もかかった。暗闇の沿道には、人影一つない不気味な静けさと、生々しい騒乱のあとを告げる乗用車の残がい、そしてメラメラと燃え上がる集落の火の手が交錯していた。

ホテルに着くと、死者三十九人、けが人百十四人という放送が聞こえてきた。だが、死者は百人を超えたというのが、もっばらの噂だ。テレビを通じて、全国民に平静を訴えるラーマン首相の悲痛な表情が、強く印象に残った。

「ストップ チャイニーズ」

次の日、厳しい外出禁止令が解かれた数時間を利用して、被害の最も大きかった「カンポン・バルー」地区へ向かった。シンガポールから共に駆けつけた共同通信社の松村支局長（故人）と一緒に。マレー人居住区に隣接する華人街は真っ黒に焼け落ちていた。マレー側の集落に入ると、屈強な若者たちが、華人の報復に備え巡回していた。

その情景をカメラに収め、引き揚げようとしたとき、背後で「ストップ チャイニーズ」という声がした。振り返ると、オートバイに乗ったマレー人の青年が三人。そのうちの一人が「フォロー、ミー」と叫んだ。村落の本部に連行され、たちまち銃や刀剣を持った数十人のマレー人に、幾重にも取り囲まれてしまった。興奮した群衆が、口々に怒声を放った。片言のマレー語しか分からぬ私。だが、その身振り、手振りから、

「ここは、俺たちの集落だ。チャイニーズは一人だって入れさせない」

と言っていることだけは分かった。だが、対応の言葉が出てこない。おまけに、取材記者証を申請中で、パスポートも手元になかった。万事休すと観念しかけたとき、ふと、とっておきのマレー語が頭に浮かんだ。

「サヤ、ワルタワン、ダリ、ジャパン」（私は日本から来た新聞記者だ）

すると、包囲網の中から年配の人が現れ、「本当に日本人ですか」と上手な日本語で話し

かけてきた。「そうですよ」と答えると、彼は仲間たちにマレー語で説明し出した。みなぎっていた殺気が、スーツと消えていくのが分かった。

危機意識と欲求不満

私たちは間もなく“釈放”されたが、「ここは、俺たちの集落だ」という言葉が、頭にこびりついて離れなかった。

別のマレー人地区「カンポン・バンダン」に入ったときだ。中年の一人が「このままでいくと、もう二十年、いや十年もすれば、マレーシアは中国系の手に移ってしまう」と言った。すでに、経済の実権を握っている華人たちに、政治の面でも打ち負かされてしまうという危機意識が、そこには感じられた。

ヨロイ戸を下ろした華人街にも、もぐり込んだ。軍隊と警察を掌握するマレー人側と違って、彼らの手に武器はなかった。しかし、物陰には鉄棒やナイフ、それに鉛の水道管を切断して先をとがらせた凶器があった。青年たちが言った。

「なぜ、中国語を公用語として認めないのか。なぜ中国語の大学を認めないのか。なぜ進学や就職で差別をつけるのか」

「複合民族国家の統一と繁栄と言うが、マレー人が常に優先され、中国人、タミール人（インド系）そして少数民族の権利は抑えつけられている」

根強い伝統と文化を守ろうとする中国系市民の多くが、この点に執着していた。

双方の言い分を聞きながら、出口のないやりきれなさが、重く心にのしかかっていった。

大事な「境界人」の役割

だが、取材を続けるうち、偶然に知り合った一人の華人青年の姿に、強く引きつけられた。彼は、騒動でけがをした人たちの治療に、献身的な努力を傾注していた。手術に必要な酸素ボンベやブドウ糖を、各地の病院や診療所に運んでいた。厳しい外出禁止令のさなか、文字どおり決死の仕事であった。彼はマレー人の患者を収容する病院にも、華人患者の待つ診療所にも勇んで飛び出していった。

流血の惨事も収まり出した二十日、避難民収容所を取材に出かけたときだ。ポンと肩をたたかれ、振り向くと、そこに彼の姿があった。睡眠不足で目を真っ赤に腫らした青年は、「この国で一番大切なことは、マレー人と中国人の心が、本当に通じ合うことだ」と言った。

宗教、伝統、文化、生活習慣の違い、異民族・人種の交錯する中で、「死ぬか生きるか」でなく、「自他共に生きる」道を真剣に追求している。すばらしい「マージナルマン」（境界人）の姿を見た思いがして、目頭が熱くなった。

マレーシアでの十日間の取材を終えた私は、シンガポールには戻らず、ジャカルタに直行した。東南アジアの事情に精通し、特にマレーシアの首脳陣とは親交の厚い、インドネシアのアダム・マリク外相に会いたいと思ったからだ。外相は快く時間を割いてくれた。そして「絶対にオフレコだよ」と前置きして、

「ラザク副首相が、あまりマレー系の立場に固執しないようにと願っている。近く、直接に会って私の気持ちを伝える」

と言った。その大局観とバランス感覚、そして盟友への深慮に感銘を受けた。文字にするのは、これが初めてである。

米国の変化と東南アジアの対応

シンガポールに駐在した、一九六八年十一月から七〇年十月までの二年間、東南アジア

地域の大きな焦点は、やはりベトナム戦争を中心としたインドシナ情勢の行方だった。しかし、この地域をめぐる国際環境は、すでに重大な変化の兆しを見せ始めていた。

再び火中の栗拾うまい

「一九六八年は、われわれにとって、大きな衝撃の年だった。米英両国はもはや、東南アジアで再び火中の栗を拾うことはないだろう」—シンガポールのラジャラトナム外相（当時）は、一九六九年の元旦、外交方針演説の冒頭でこう言った。いまなお心に残るセリフだが、いみじくも東南アジア各国首脳の胸中を、ズバリと表現していた。

一九六八年と言えば、米軍機の北ベトナム爆撃停止、パリでのベトナム和平交渉の開始、そしてジョンソン米大統領が退陣した年。同時に、英軍のスエズ以東からの撤退声明が出された年でもあった。米英両国の、長い間君臨してきた東南アジアでの約束が、突如として重大な疑惑にさらされた年だった。

果たせるかな、米国の新大統領に就任したニクソン氏は、早くもその布石を打ち出していった。最初の兆候は、そのヨーロッパ訪問に表れていた。六九年二月下旬、西欧五カ国を歴訪したニクソン大統領は、この間に三回もフランスのド・ゴール大統領と会っている。フランスは、かつてのインドシナ三国（ベトナム、ラオス、カンボジア）の旧宗主国。そしてド・ゴール大統領は、西側首脳の中では、中国の毛沢東主席、周恩来首相と最も親交の厚い人物だった。

この点に関し、『ル・モンド』の著名なロベール・ギラン記者が後日、次のように打電しているのは興味深い。

「ド・ゴール大統領は、ニクソン大統領から二つの点で重大な意味を感じとっていた。①ニクソンは米軍をベトナムから撤退させようとしている。②ニクソンは、たとえどんな複雑な道をたどっても、中国の国連参加と、国交正常化にまで進もうと決意している—」

「ニクソン・ドクトリン」

ニクソン大統領がこの後に打ち出した画期的政策は、六九年七月二十五日、アジア諸国訪問に先立ち、グアム島で発表したいわゆる「ニクソン・ドクトリン」だった。その基本構想は「米国は各国との条約上の約束は守るが、すべての国は民族自決の原則に立つべきで、紛争処理や安全保障の確保も、第一義的には各国の自主性にゆだねる」というものだった。

これと並行して、対中接近政策が採られ始めた点も見落とせない。米政府は、ニクソン大統領のアジア諸国への出発直前の七月二十三日、①対中国貿易制限の部分的解禁、②連邦議会の議員、報道陣、教員、学生、医師、科学者、米赤十字社代表などの中国への旅行制限の緩和政策、を明らかにした。

そして、アジア諸国歴訪に続いた、ニクソン大統領のルーマニア訪問で、対中関係改善への意思が、かなり明確となった。当時のルーマニアのチャウシェスク国家評議会議長（国家元首）が、ソ連、東欧圏にありながら、ソ連のチェコ侵入事件（六八年八月）を批判し、自主独立路線を歩みつつ、中国との協調を強く主張していたからだった。

いずれにせよ、「ニクソン・ドクトリン」に基づき、曲がりなりにも南ベトナム、タイなどの米軍撤退が始まり、戦争の「ベトナム化」を含め、米国のアジアにおける戦略的転換が現実に進められ出したことは、注目に値する。

ベトナム戦争の裏側で

だが、米国はベトナムからの撤退に際し、北ベトナムや南ベトナム民族解放戦線（ベトコン）の軍事力を、できるだけ消耗させたいと考えていた。その一環として米軍は、北ベ

トナム側について抗戦を続けるラオス左派「パテト・ラオ」の支配地域への空爆を強化し始めた。

当時のラオスには、左・右・中立の三派から成る連合政府があり、中立派のプーマ首相が頂点に立っていた。しかし、ベトナムとの国境地帯周辺では「パテ・ラオ」が勢力を伸ばし、北ベトナムはこの地域を利用して、ベトコンへの食糧や軍需物資を輸送していた。

ベトナムの陰で忘れられていた「戦場の裏側」ラオスに、新しい状況が生まれてきた。米軍は北ベトナム爆撃を停止した代わりに、ラオスに空軍力の使用を集中し始めた。こんな六九年十月初旬、ラオス北部のジャール平原から、爆撃強化で大量の避難民が首都ビエンチャンに逃れてきたという消息を知り、現地へ飛んだ。

シンガポールを発つとき、ロイター通信の東南アジア総局長が、「ラオスに行ったら、ぜひウドン・サナニコン将軍（ラオス国軍総参謀長）にお会いなさい」と言ってくれた。

ビエンチャンでは、まず避難民の群れでござった返す、ラオス最大のパゴダ「タック・ルアン」の模様を取材。次いで「パテトニフオ」の指導者スファヌボン殿下との仲たがいを深めていたプーマ首相と会った。そして「パテトニフオ」のビエンチャン駐在首席代表、ソット・ペトラシ氏の話聞いた。さらに、北ベトナム軍の捕虜たち九十四人がいるという、「秘密キャンプ」に押しかけるなど、ベトナム戦争の裏側で進行しつつある事態を取材し続けた。

ラオス総参謀長の洞察力

ラオスを去る前日、ウドン・サナニコン将軍に会った。国軍総参謀長として執務に忙殺されていた将軍は「今夜、ぜひ自宅に来てください。妻の手料理を食べながら、ゆっくり語り合しましょう」と言った。

ウドン将軍は、昼間のいかめしい軍服姿と違い、半袖シャツに、半ズボン姿で現れた。酒もタバコもやらず、読書とサッカーだけが趣味という将軍に、まず、ラオスの戦況を尋ねた。

「パテトニフオを支援する北ベトナム軍は、この一、二年来、従来の定型を破って、雨期中にも攻撃をかけてくる。この夏も、ずいぶんやられましたよ」。こう言った将軍は、「しかし最近、北ベトナムの戦闘部隊のかなりの部分が、前線から引き揚げた兆候が見える。心の支えだったホー・チミン大統領の死（六九年九月三日）は、彼らに大きな衝撃を与えたに違いない。ジャール平原の戦局が、政府軍に有利に働いているのはこのためだ」との見解を示した。

三日前に会った「パテトニフオ」のソット・ペトラシ代表も、当面の戦況の不利は認めていたが、必ず奪回すると自信ありげだった。この話をすると、ウドン将軍は笑いながらこう言った。

「時折、ソット代表と“戦争談義”をやります。忘れないでください。パテト・ラオのスファヌボン議長はなお、ラオス連合政府の副首相ですよ。われわれは一軒の家の中で、兄弟ゲンカをやっているのです」

そう言えば、プーマ首相と会見した際、首相はもっぱら「北ベトナム軍の存在」を強調していた。逆にソット代表は「米軍機の爆撃強化」を特に非難していた。お互いに外国の介入がなくなれば、ラオス問題は話し合いで解決できると暗示していたのかもしれない。

「断っておくが、ラオスに米軍はいない」と言った将軍は、「米国はいま、内外の圧力で、南ベトナムやタイからの撤退を余儀なくされている」と述べた。

話題が、東南アジア進出を狙うソ連の動きに及んだとき、将軍はこう語った。

「いまのソ連は、中国のことで頭がいっぱいだ。東南アジアに友を求めようとするのもそのためだ。確かにいくつかの国は、中国との関係でソ連に接近しつつある。だが、大きな弱点は、東南アジアに来ているロシア人が、あまりにも少ないことだ」

重要な中国との関係調整

そして、ラオスだけでなく、東南アジア諸国の将来にとり、避けて通れぬ大きな問題として、中国との関係調整を挙げた。

「ラオスは中国と国境を接している。かなたには七億の人口（当時）と膨大な資源がある。これに比べてラオスの人口は三百万足らずです」

「私は、シアヌーク殿下のカンボジアのような生き方が賢明だと思う。東南アジアの平和を実現するには、中国と安定した友好関係を樹立することが必要だ。そのためには、東南アジア諸国が互いに協力し、非同盟中立の方向をたどるのが良策だ」

そしてウドン将軍は、日本もこうした考え方に理解と協力を示してほしい、と語った。

「何もありません。今日はラオス料理にしましたよ」

そばで、夫人の声がした。食卓にはキュウリモみや、ジャガイモ、ダイコン、ニンジンなどをどの煮つけがあった。それは、幼いときから食べ慣れた、ふるさとの味にそっくりだった。

「アジアの真の平和と安定は、武器や金で買えるものではない。われわれが求めているのは、心と心の交わりです。東洋と西洋では文化も違うし、物の考え方にも、まだまだ開きがある」

仏教徒らしく、将軍はこう結んだ。

米国の大きな戦略転換に直面した東南アジアで、これは忘れ難い会見となった。